

金城型里山教育のこころみ

— 女子学生の環境保全活動参加へのきっかけづくり —

A Trial on the Environmental Education Using “Satoyama”
Encouragement to Participate in the Conservation Activity for Students in Women’s University

小 野 知 洋¹

Tomohiro ONO¹

¹金城学院大学現代文化学部情報文化学科

¹Department of Information and Culture, College of Contemporary Society and Culture, Kinjo Gakuin University

緒 言

金城学院大学では、2009年の学院創立120周年・大学設立60周年を記念して、大学内の自然環境整備にとりかかり、その一環として大学内の自然林を里山環境として整備する活動を開始した（岩崎ら、2011）。この活動では、大学内の自然環境整備を通じて、学生の教育の中にキャンパス内の豊かな自然を取り込むことが重要な課題として取り上げられている。本稿では、整備対象となる里山という環境の特性、里山環境保全に果たす若者の役割、若者に目を向けさせるための動機づけ、これらを含む大学における環境教育の在り方について、本学での活動を通じて検討し提言

を行うものである。

金城学院大学校地を含む、都市周辺の緑地（里山）が抱える問題

金城学院大学のキャンパスは名古屋市守山区の北東部に位置し、1948年にキャンパスとしての整備が開始された。当時の本学キャンパスの写真をみると、まばらに生えるアカマツなどにおおわれた、まさにはげ山であった。この状況は名古屋市郊外では共通の状況で、その中で宅地開発などが行われたが、その一方で、それを免れた場所では、その後数十年を経て植物遷移が進み、現在はコナラやアベマキを中心とした落葉広葉樹林が発達し、さらにはシイ、カシ類を中心とした常緑広葉樹



図1 1960年頃と2009年のキャンパスの比較

の侵入も目立ってきている。本学キャンパスにおいても状況は同様で、年を追ってキャンパス内の緑地は目覚ましく復興してきた。しかし、その一方で、かつて荒れ地を美しく飾っていたコバノミツバツツジなどの日照を好み明るい林に分布していた樹種は徐々に衰退した。状況は異なるものの、社会的背景の変化から放置され荒れ果てた中山間地域での里山環境の変遷と、樹種の変化という点では類似の変化が生じている。加えて、放置されたモウソウチクの竹林が徐々に分布範囲を拡大し、落葉広葉樹の林内に入り込む状況も同様である(図1)。

都市近郊の緑地は当然のことながら中山間地域の里山と比べて規模が小さく、また長く見積もっても、はげ山からの森林復興としてはたかだか100年という歴史の浅さから、現状では生物の多様性が豊富とは言えない。しかし、今後の適切な管理があれば、多様な生物を抱える里山環境を形成できる潜在力はあると思われる。ただ、それを育むためには、管理に携わる住民の存在が必要であるが、都市部の居住者にとって関心はあっても、どう手を出してよいのかわからないというのが実情であろう。

里山管理活動の困難さ

里山の管理には素人が携わる上で、3つの困難なポイントがある。第一は、作業が非常に重労働であり、都会の生活者がすぐに作業に加わるのは難しいことである。例えば、シイタケの原木栽培を行うためにはいわゆるホダ木を積み重ねなければならないが、その作業がいかに困難であるかは、経験した者でなければわからない。これに限らず、草刈り、落葉集め、間伐など、どれをとっても、たいへんな重労働である。

このような重労働を経験者はかなりの高齢

であってもこなしているのだが、それは経験に裏打ちされた技術を持っているからである。農業や林業活動全般に言えることであるが、第二のポイントとして、これらの活動の従事者たちには、都会生活者から見ると驚異ともいえる技術と知恵が持っている。これは長年の生活の中で育まれ継承されてきたもので、都会の在住者が一朝一夕に身につけることは困難なものばかりである。

第三のポイントは、経験の浅い者がこのような活動に加わった時に、一時的には作業の新鮮さを楽しみと感じて熱意を持って取り組むことができるかもしれないが、他方で、技術の未熟さ、体力のなさなどから、継続できないのが常である。趣味としての取り組みだと、自分の都合で気ままに行いたいし、つらい時は休みも欲しくなる。しかし、自然相手の活動では、継続性は必須の要件であり、時には天候などの厳しい条件のなかでも、季節に応じて決められた作業を行わなければならない。

里山管理活動の動機づけ

このような厳しい活動を、それでも継続して行うためには、活動そのものに対するよほどの動機づけがなければならない。里山環境は生物の宝庫であり、学術的な意味からも保全には大きな意味があるが、学術的な興味や使命感は研究者にとって動機づけになったとしても、一般市民にとって活動に駆り立てる原動力になるとは思われない。

では、何がその原動力になるのだろうか。際立って美しい姿、誰もが知っているような話題性などは、人々を駆り立てる原動力になる。例えば、佐渡におけるトキの放鳥、保護とそれにとまなう里山環境の整備活動はそのよい例である。

野生個体群が一旦絶滅した後、中国から導

入され順調に個体数が増加した飼育トキは、2008年から佐渡ヶ島で野生復帰のため放鳥が開始された。野生復帰には、トキが野生下で十分に生活できるための周辺の環境整備が必須である。トキ絶滅の原因の一つに、えさ場となっていた棚田の減少があるといわれる。そのため、野生復帰にあたっては、長年にわたって放置されていた棚田を復元する活動が並行して行われている（新潟大学トキ野生復帰プロジェクト事務局、2008）。この例では、活動が全国的な注目も集めるため、参加するボランティアを含めて活動を行う者にとっては大きな動機づけとなるに違いない。その話題性の結果、活動参加者も増えるし、企業が社会的貢献活動として加わる例も見られる。また、里山再生活動の現場を見学するエコツアーも企画され、観光資源としても新たな価値が生み出されている。さらに、これらの農地で収穫された無農薬栽培のコメは「トキ認証米」という付加価値をつけたブランドとして販売もされている（図2）。

このように、保全活動を行う背景にいわば「目玉」となるものがある場合には、人々を駆り立てるさまざまな動機づけが存在する。しかし、これはごく例外的なもので、一般的に里山環境は「ありふれた」存在であって、少なくとも外部からの来訪者を継続的に惹きつける動機づけがないのが実情である。



しかし、都市に生活する住民は自然との関わりに飢えており、一時的ではあるかもしれないが、時には思わぬものが一定の「目玉」価値を持つこともある。朝日新聞（2007年4月8日）の記事によると、栃木県の作新学院大学では学生の発案で、ある地区の処理に困っていた竹林の整備活動に関して、無償どころか手弁当での参加を募った。地域住民は、たいへんな仕事を報酬もなくやってくれるモノ好きがいようと想像もしていなかったが、いざふたを開けると、たいへんな数の参加があったとのことである。つまり、視点を変えれば、これも一つのレジャーであり、動機づけになりうるのである。

若者の自然離れと若者への期待

都市に生活する現代の若者（特に、大学生）を考えると、一般的には、驚くほど自然との接触の機会を失っているように思われる。たとえば筆者が授業担当している学生の場合、かなりの者が生き物（特に「ムシ」と称する一群の生物）に驚くばかりの嫌悪感を持つばかりでなく、道路を踏み出して草原や林の中に足を踏み入れようなどとは毛頭考えない。ただ幸いにも、自然や環境に関心は持ちつつも、それに接する機会がない、活動参加のき



図2 佐渡ヶ島の「トキ復帰プロジェクト」によって復元された里山環境とトキ認証米

かけがわからない、という学生が一定数存在するのも事実である。最初からまったくの拒否反応を示す一群は別にして、関心を示す一定程度の割合の学生に対しては、アプローチをする価値が十分にある。これらの学生を何とか引き入れたいのである。

その背景には若者に対する期待があるからである。その期待とは、若者が強い体力を持っていること、若者には柔軟な発想があること、だけではない。豊田市を中心に自然保護活動を推進している大島昌平氏や後述の八竜湿地愛護会の柴田美子氏など、ボランティア活動のリーダーとしての経験豊富な方々の話では、ボランティア集団は同好の士の集まり故に内向きになりがちだが、若者の存在は集団内の人間関係を融和したり集団間の交流をする上で非常に価値があるとのことである。そこには単に活動の後継者という意味を超える期待が存在する。

先行の事例

静岡県では県の主導で「一社一村しずおか運動」を展開している。その一つとして、静岡大学農学部が梅ヶ島大代地区と、大学側は学生の実習の場として、地区側は若者による労力提供や地域活性化を期待して、連携をしている。筆者はその現場をみる機会があったが、そこで強く感じたことは、参加している学生の熱意、活力であった。学生たちは単位（参加すると、選択科目として単位になる）取得という目的より、活動そのものに興味を持っている。つまり、活動の喜びと充実感が何よりの動機づけなのである（図3）。

静岡大学の場合には、農学部に入學した学生を対象としているものなので、もともと自然環境や農業活動に関心をもった学生が多いのは事実であろう。しかし、必ずしもそのような専攻学生ばかりではない場合でも、学生

が関心をもって積極的に参加している例は少なくない。龍谷大学では瀬田キャンパスの里山保全を全学的なプロジェクトに発展させて全学共通の授業科目の中にとり入れているだけでなく（丸山・宮浦，2007）、学生のサークル活動にも発展させている（図4）。これらの例はいずれも、現代の若者の中にある、里山や自然の保全、農業活動など、自然との触れ合いを求める活力、さらには活動の輪を多様に広げていく大胆さ、を共通に感じさせる。



図3 静岡大学農学部の梅ヶ島大代地区での活動
学生による山道整備と荷運び



図4 龍谷大学学生による里山内での農地開拓活動

学生の動員と動機づけ

自然の中に身を置くことに慣れていない学生を現場に引き入れるにはそれなりの強制力が必要だと思われる。とりわけ文科系・社会科学系を中心とした学部が中心の大学の場合にはなおさらである。活動に参加したい思い

をもつ学生が潜在的に存在することは確かだが、そのきっかけがない。呼びかけをしても、自ら名乗り出る積極性はない。そんな場合、最初は強制的に活動を体験してもらうことが必要となる。その意味で、大学は単位取得という強制力があるので、何となく自然には興味があるという程度の動機であったとしても、あるいは教室で座学を受けるよりは外に出る方が楽しそうだとやや不純な動機であっても、参加させること自体はさほど難しいことではない。ただ、非常に大切なことは、結果として参加者に「やってみると案外楽しい」という強い印象を植え付けることである。上述のように、これらの活動はそれなりに重労働である場合が多いし、一般的に「ムシ」も多く、実際に、刺されたりかぶれたりすることもある。でも、それを凌駕する楽しみがあればリピーターを育成できる。問題は、その活動をどう楽しいものにするのかである。

では、何が「楽しみ」の対象になり得るのか。トキのような美しく貴重な対象があれば出会いそのものが素晴らしいことである。トキほどではなくても、美しい花が見られるとか、かわいらしい動物に出会えるという要素は、もちろん充足感につながる。だが、筆者の経験から、もっと単純に「体を動かして活動することの喜び」や「自然に手を加えることの達成感」が案外重要な意味を持つと感じるに至っている。そして、それが次のステップにも広がっていくように思われる。

上述の大島昌平氏は「ボランティアによる活動においても、科学的にも環境保全上意義が深いというお墨付きが意識の中では活動の意義付けにはなっているが、一番根底にあるものは自然の中で体を動かすことや作業への充足感である」と言っており、私も同感である。

金城学院大学の自然環境と保全・管理活動

本学内の緑地は、校舎周辺の限られた場所を除いて、植物遷移の進行に任されていた。なお、本学構地内には、東海丘陵要素植物群が分布する八竜湿地が存在し、名古屋市、地元ボランティア団体である八竜湿地愛護会（代表：柴田美子氏）、および本学の協力のもとで保全されている（図5）。この湿地は見学場所としては利用されているが、保全に一定の専門的な知識が必要であるために、学生の活動対象とはしていない。

過去の写真などを見ても、大学キャンパスが置かれて以来およそ60年の間に、大学内の植生はとどまることなく遷移を続けてきた。当初はアカマツやネズミサシなどを中心とした低木林であった林内に、やがてコナラ、アベマキなどの落葉広葉樹が侵入して徐々に高木化し緑に覆われてきた。現在では、胸高直径で50cmを超えるコナラやアベマキが林内に多数存在するようになった。しかし、このような状況に至れば、当然の帰結として、アラカシやコジイなどの常緑広葉樹の成長を促すこととなる。その結果、樹林内は徐々に薄暗い環境に変化し、コバノミツバツツジなどは衰退し、林縁のごく限られた場所にのみ残る状況に至っている。また、一部ではモウソウチクの侵入も著しい。

そこで、本学院創立120周年および本学設立60周年にあたる2009年に、「大学キャンパスの緑から地球環境を考える」というプロジェクトが採択され、学生・教職員を交えた大学キャンパスの見直しと整備計画の検討が開始された。これを機に筆者も学生に呼びかけ、大学内の自然林の管理活動などを学生とともにおこなうことを計画した。現在は私の専攻生だけでなく、担当する授業の中での呼びかけに応じてくれた学生も加わって活動を行っている（図6）。これらの学生はもともと一



図5 八竜湿地の全景と間伐作業の結果復活したコバノミツバツツジの群落

定の関心を持っていた学生であるので、彼女らの姿から全体を普遍化することはできないが、女子大学の学生にも、このような活動にかなりの潜在的な関心があることを感じた。所属学部をみても、文学部を始めとしてすべての学部を網羅している。そして、活動を開始した時に、学生が異口同音に「活動の充足感」を感じてくれたのは何よりも嬉しいことであった。間伐作業などでは、当初「木を切るのはかわいそうだ」という気持ちもあり、また初めてののこぎりの作業におっかなびっくりであったが、1回作業を経験すると、自主的にどんどん伐採し、木を切ることの「快感」を味わうように変化していった。また、間伐の結果、林が目に見えて明るくなることへの達成感も感じているようであった。この

ことは、学生たちに意識的に注意を向けさせることによって、十分に自然保護などの活動に目を向けさせることができるし、いずれはその中から活動をリードしていく人材も育成できるということを期待させる。

今後の活動と金城型里山教育が目指すもの

このような活動を今後、どう組織化し、どう継続していくのが今後の大きな課題である。現時点では、教員の参加はボランティアなものであって、里山に関わる活動の授業への導入も個別の試みとして行われているに過ぎないが、本学でこのプロジェクトを継続的かつ独自のものとするためには、ぜひとも正課の授業科目として取り入れることが必要である。例えば、龍谷大学では瀬田キャンパスに保有する広大な里山環境の保全と地域との連携を、文部科学省オープンリサーチセンター整備事業として教育研究に生かすとともに、全学共通の科目として「里山学入門」を開講している。類似の試みは金沢大学、近畿大学、長野大学、京都女子大学など数校で実施されている。これらに共通するのは、いずれも身近に実習可能な里山を保有していること、座学だけでなくアクティブラーニング的な要素を含んでいること、地域の歴史や文化などを講座に含んでいること、などである。



図6 金城学院大学構内の林地での学生による間伐作業

本学ではまだこれら先進校のような組織的な取り組みが行われていないことは事実であるが、一方で、本学はこれらの先進校にはない好条件を整えている。何よりも、本学では大学キャンパスそのものが里山内にあるといっても過言ではない状況であり、授業の中で教室を出てすぐに里山に入り込むことが可能である。これはアクティブラーニング的な要素を含む講座にとって極めて有利な条件となる。また、本学内には「八竜湿地」が存在し、他大学ではまねのできない希少環境見学をプログラムに取り込むことが可能である。さらに、すでに本学ではアクティブラーニングを意識した「炭焼き窯」など他大学にはない特徴的な施設の設置がすでになされている（図7）。なお、本プロジェクトへは、すでに都市計画、都市社会学等の分野の本学教員も加わっているが、今後、本プロジェクトの中で正課の科目として「金城台の自然と里山を学ぶ」（仮称）を取り入れる際には、さらに輪を広げて、自然科学の側面に偏ることなく、文化、社会、教育など多方面の教員の参加を促す必要があらう。



図7 炭焼き窯と大学内の竹材を利用した竹炭製作

このような意識の下、仮に、適切な授業担当者確保できたと仮定しての授業プログラム案を以下に提示する。想定は、全学学生対象の共通教育科目とし、実習的要素を含むことから受講人数の制限は30名とする。

「金城台の自然と里山を学ぶ」（仮称）（オムニバス、15週半期2単位）

- 1 里山とはどんな場所か：自然科学からみた里山
- 2 里山とはどんな場所か：社会・文化からみた里山
- 3 金城学院大学の自然：キャンパスの歴史と植生遷移
- 4 八竜湿地の植物（見学実習）
- 5 落葉広葉樹の林（見学実習）
- 6 里山の管理作業（実技実習）
- 7 竹の文化、竹林の自然
- 8 竹炭づくり（実技実習）
- 9 里山の知恵
- 10 里山が抱える問題
- 11 中山間地域の村おこし
- 12 海外の「里山」、都市と自然の調和
- 13 里山と子どもの教育
- 14 竹を使った遊び、里山の恵み（実技実習）
- 15 試験

このような授業活動に加えて、現在すでに結成されているK S C（Kinjo Satoyama Conservation）という教職員・学生が一体となったサークルの活動と合わせて、学生たちに、自然と親しみ、自然環境を保全し、さらには身近な環境の改善に努める意識を芽生えさせることができれば、当面の目標は達成と評価できるかもしれない。

しかし、本プログラムを考えた時にもう一つ意識しなければならないことは、このような学生時代の体験を、その後はどう生かせるか、将来の活動のきっかけとするのかという点である。

本学では自然科学系に区分される学部・学科は限られており、卒業後の進路として、環境保全分野で活躍する者を想定することは難しい。したがって、在学中の活動がそのまま

将来の活動に結び付くということは考えにくい。ただ、本プロジェクトが意図する教育目標は専門家育成というより、むしろ、今後の社会において、いずれ考え意識する自然との関わりのかきかけを作るものと捉えるべきである。多くの学生は家庭を持ち育児の経験をするようになるが、その際に、自然と出会う機会が必ず訪れるであろう。また、将来、ボランティア活動として環境保全活動に加わることがあるかもしれない。そんな時に、たとえわずかであっても、林に足を踏み入れ、樹木の間伐を行い、竹を伐採し、落葉の中に多くの生き物をみた、などの経験が必ず意味を持ち、少なくとも環境保全活動に参加しようとする時の躊躇を減じるであろう。ささやかかもしれないが、筆者にはこの経験の差は見逃せないものだと感じられる。

ただ、それを助長するためのもう少し積極的な働き掛けも必要であろう。例えば、上記授業を受講した学生などが、卒業後も学内自然環境の保全活動に参加できる体制を作ること必要であろう。もちろん、同窓生に限らないで、地域の方々にも輪の中に加わってもらえればさらに幅広い連携を生み出すきっかけにもなる。上述した八竜湿地の保全にはすでに地域の強固な活動の輪ができている。八竜湿地だけでなく、本学キャンパス全体が地域の宝であり、同窓生の宝であり、もちろん大学の宝になることを期待したい。

謝 辞

本稿にかかわる調査において、環境保全ボランティア活動のリーダーとして豊富な実績を持っておられる大島昌平氏、柴田美子氏へのインタビューは、筆者の考えをまとめる上で極めて有意義であった。両氏の活動への敬意を表するとともに、感謝申し上げる。

引用文献

朝日新聞（2007年4月8日）

列島360° 「山村と私大、協力協定」

岩崎公弥子、小野知洋、河村典久、柳谷勝（2011）

里山の資源を活用した教育活動の実践

金城学院大学論集（社会科学編）7：1-12

新潟大学トキ野生復帰プロジェクト事務局（2008）

トキの野生復帰に向けた佐渡島における環境問題

保全の実践プロジェクト

新潟大学トキ野生復帰プロジェクト中間報告書

273pp

丸山徳次、宮浦富保（編）（2007）

里山学のすすめ

昭和堂 379pp